

Accounting, Arithmetic & Art Journal



NO. 30

The **P**ACIOLI **S**OCIETY **J**APAN

2016. 04

◆ 久野秀男先生の思い出

今年になって久野秀男学習院大学名誉教授のご長男から封書をいただきました。お便りには2015年10月27日に先生が心不全のためご逝去(享年91歳)されたとありました。

平成6(1994)年3月5日開催の本協会第6回フォーラム(東京市谷の日本大学会館)にご講演をお願いしたことがありました。大正13(1924)年のお生まれでしたから、ご定年を前に、これまでの研究の総括を考えておられたのでしょうか。その年(1994年11月10日)は『スムマ』出版から5百年目にあたり、各地で簿記会計を記念すべき催しがありました。先生から頂戴した論題は「パチョーリ以後:『簿記』とはなんだったのか」(AAAジャーナル No.6 参照)でした。この同じテーマは同年6月1日の東京経済大学主催の日本会計史学会においても、さらに同月18日の日本簿記学会でも特別講演され、翌年1月刊行の『学習院大学経済論集』(第31巻第4号)にその御労作が掲載されました。

晩年の先生の御論稿には「…とは何だったのか」のシリーズが数多くあります。「Balance Sheet とは…」(同大学紀要28巻2号)に始まり、損益計算書(28/3)、貸借対照表(28/4)、Profit & Loss Account(28/4)、剰余金計算書(28/4)、剰余金処分計算書(28/4)、決算公告(29/1)、商品勘定(29/3・4)、残高勘定(30/2)、複式(30/3)、財産法(31/1)と続いて、締めくくりが先の「簿記とはなんだったか」でした。 → (この続きは本誌12ページへ)

◆ 福澤諭吉『帳合之法』における近代思想と

「パチョーリ簿記論」との関連性

片岡 泰彦（大東文化大学・本協会顧問）

I はじめに

明治の初め、日本の近代文明成立のために、最も早くそして最も大きな貢献を果たした先駆者の一人福澤諭吉(1835～1901)は、『学問のすゝめ』『西洋事情』『文明論之概略』と並んで、『帳合之法』を著わした。この『帳合之法』は、アメリカの簿記書の翻訳である。したがって、単なる簿記技術の解説書のように思われがちであるが、それは大きな誤りである。福澤が英文から翻訳した日本語は、単なる直訳ではなく、日本の習慣と風土に合わせた極めて解りやすい名訳となっている。しかも、福澤は、自分の近代的思想を、本の解説の中に取り入れたのである。まさに、『帳合之法』は、西洋式簿記の日本における最初の文献であり、日本会計史上複式簿記の嚆矢と言うべきものである。

『帳合之法』は、『学問のすゝめ』とほぼ同時期に出版されたが、その内容を見る限り、両者は強く関連していた。すなわち、近代文明形成を目標とする精神は、両者に存在していたのである。『帳合之法』が、果そうとしていた目的は二つあった。第一は思想的な目的であり、第二は簿記技術上の目的である。思想的な目的は、近代文明をめざす企業家精神の向上であり、簿記技術上の目的は、実学としての西洋式簿記の日本語による解説である。そしてこの二つの目的は、密接な関連性を持っていたのである。

II 『帳合之法』における近代思想

福澤諭吉は、明治6年(1873年)6月と明治7年(1874年)6月に『帳合之法』を慶応義塾出版局より出版した。この『帳合之法』の原典は、Bryant & Stratton's Common School Bookkeeping, 1871, New York である。

明治6年版の初編二冊は、略式(single entry)を翻訳・解説し、明治7年の二編二冊は、本式(double entry)を翻訳・解説している。福澤は、この翻訳書の出版をもって、日本に一つの新しい文化的精神を与えようとしたのである。その理由の第一は、英語からの単なる翻訳ではなく、福澤の著書と言っても差し支えない程、よく咀嚼された日本語をもって執筆し

ているからである。福沢は、『帳合之法』を執筆した理由として、初編の序文で次の4つのことをあげている。もちろん、この部分は原文にはない。福沢自身の思想を解説したものである。

第一に、「古来日本国中に於て、学者は必ず貧乏なり金持は必ず無学なり、故に学者の議論は高くして口にはよく、天下を治ると云えども、一身の借金をば払うことを知らず。金持の金は沢山にして、或はこれを瓶に納(め)て、地に埋(め)ることあれども、天下の経済を学(び)て商売の法を遠大にすることを知らず。…省略…」

福沢の第一の説は、簡単に言えば、次の通りである。学者は高い議論はするが実学を知らず貧乏である。そして金持は金はあるが学問を知らない。しかし、商売も学問の対象であり、経済は賤しいものではない。学者も金持も実学を学ばば、共に金持となり、学問を有することになる。そして実学こそ帳合之法というのである。すなわち、日本経済発展の基礎こそ帳合之法と言いたかったのである。

第二の説は、現在、多くの大家で使用されている帳合之法(=帳簿方式)は、混雑が多く、棚卸(=決算)にも多くの時間がかかり、2ヶ月を要する場合もある。これは、国家全体の不便と言える。しかし、この自分の説く帳合之法を採用すれば、不便は解消し、全国における公私の会計は便利となるというのである。

第三の説で、福沢は、帳合之法の重要性とともに学問の本質を説き、さらに日本の階級制度をも批判するに至る。従来 of 学者が学ぶ和漢の書は、虚文空論であって、百姓・町人が学んでも、何の益がなく、身代を失う恐れがある。この帳合之法を、学校の生徒の読本として、学ばせれば、実学としての帳合之法の価値を知り、父母達も子弟を安心して、学校へ行かせることとなるのである。そして和漢の空学者達が、人を愚にした罪は深いが、この帳合之法の一書をもって、その罪を消し、農工商三界の万霊に功德を施すことができるというのである。

第四の説の中で、福沢は、まず商売も工業も学問であることを説く。そして天の定則に従い、心身を労して報酬を得ることは商売なので、役人も古の武士の仕事も商売なのである。それを世間一般では、役人や武士の仕事を貴く思い、商業や工業の仕事を賤しく思うのは誤りであるというのである。すなわち、商業も工業も、さらに役人も武士の仕事も、すべて商売であり、商売は学問であると説く。そして、江戸時代の大名の家を、一商社に例え、米を金銭に換算し、総収入から利潤計算を遂行しているというのである。

これは、実学としての商売の学問性を説くとともに、伝統的な士農工商の階級制度を痛烈に否定しているのである。



Ⅲ 『学問のすゝめ』と『帳合之法』の思想上の類似性

『学問のすゝめ』は、明治5年2月から同9年11月までのほぼ5年間にわたり出版されたものである。したがって、『帳合之法』初編出版(明治6年6月)の1年4ヶ月前に始まり、『帳合之法』二編出版(明治7年6月)の2年5ヶ月後に完成したものである。

『学問のすゝめ』は、17編からなるたった161頁の小冊子である。しかし、その内容の改新性と豊富さは、大冊をも凌ぐもので、当時かなりの影響を世に与えたのである。もちろん出版部数も340万部に達し、大ベストセラーとなった。

そして、この『学問のすゝめ』の中に、『帳合之法』を重要視し、解説する箇所が多く見られるのである。当時を代表する有名な2冊の大著は、共通の思想で連結していたことを次に述べたい。

『学問のすゝめ』は、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと言えり。されば天より人を生ずるには、万人は万人皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく、万物の霊たる身と心の働きをもって、天地の間にあるよろずの物を資り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずして各々安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。」という有名な書き出しで始まる。

さらに、「人は生れながらにして貴賤貧富の別なし。ただ、学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり。」とある。

『帳合之法』でも、論述したように、福沢はまず士農工商の階級制度を否定し、学問の重要性を説く。学問を勤め、物事を知るかどうか、貴人か下人かを定める要素になるというのである。さらに『学問のすゝめ』第二編において、福沢は学問の本質について解説する。次にその大要を記述する。

学問には、無形の学問と有形の学問がある。神学、理学等は、形のない学問である。天文、地理、窮理、化学等は形のある学問である。ただ、文字を読むことだけで学問とするのは、大きな間違いである。文字は学問をするための道具である。例えば、家を建てるのに槌鋸が必要であることと同様である。槌鋸の名を知るだけで、家を建てることを知らないのは、大工と言えないのである。文字を読むだけで、物事の道理を理解しない者は、学者とはいえない。すなわち、論語読みの論語知らずは、この人達のことを言

うのである。経書史類の奥義には達しても、商売の法を心得て正しく取引をすることの出来ない者は、帳合の学問(帳合之法)に拙き人と言うべきなのである。世帯も、帳合も、時勢を察することも学問である。和漢書の書を読むことのみが学問というのではない。

ここでの学問の本質の解き方は、『帳合之法』の場合と同様である。学問には、いろいろな学問がある。例えば、世帯(一経済)も帳合之法も学問である。そして、学問とはただ文字を暗記することだけではなく、その内容を理解しなければならないのである。

第14編「心事の棚卸」の中で、福沢は商売における棚卸、さらには人生における棚卸の重要性を説く。商売を始めるに当り、最初から損失を計画する者はいない。自分の才能と元金を基とし、世の景気を考え商売を始めるのである。

そして、1ヶ月または1年後に、棚卸決算を行い、帳合の法の中で損益の平均法を作成すれば、利益か損失かが明白となるというのである。ただし、福沢の考える所は、ここでは商売の棚卸のみではなく、心事の棚卸をも説きたかったのである。

人生の中にも、帳合の思考が必要であって、この思考が欠けてはならないのである。自分自身の人生に対し、自分は何をすべきか、何をしているかを常に点検し、自分の有様を明確にし、後の方向を決めることこそ智徳事業の棚卸というのである。

IV 『帳合之法』の原著

福沢が翻訳・出版した『帳合之法』の原著は、Bryant, Stratton 及び Packardの共著による Common School 版の Book Keeping; Embracing Single and Double Entry, New York, 1871年である。

原著は、第1部の単式簿記(single entry, ただし福沢は略式と訳している)、第2部の複式簿記(double entry, 福沢は本式と訳している)と巻末の先生と生徒のための実務上の手引き(Practical Hints)から構成されている。第1部は、四つのセット(福沢は式と訳している)から成り立っている。

第1セットは、日記帳(day book)と元帳(ledger)からなる。

第2セットは、日記帳, 元帳, 現金出納帳(cash book)そして資産負債表(statement)からなる。内容は、織物小売業(retail dry goods business)の取引を扱っている。第1セットと異なる点は、現金の出口を記入した金銀出入帳と資産(Resources)と負債(Liabilities), そしてその差額から



資本(Present Worth)を示した資産負債表を作成したことである。

第3セットは、日記帳、元帳、売上帳(sales book)、現金出納(cash book)、手形帳(bill book)、そして資産負債表(Statement)からなる。

第4セットは、日記帳、売上帳、元帳、現金出納帳、曜日帳(time book)そして資産負債表からなる。

第2部の複式簿記も、四つのセットから成り立っている。ただし、福沢が翻訳したのは、第1セットと第2セットのみである。詳細は後述する。

V 『帳合之法』における翻訳方法

福沢諭吉は、原書を日本語に翻訳するに当たり、注意した点を、『帳合之法』初編一の中で次のように解説している。

1. この書は、原本の直訳である。ただしその国の人の姓名をそのまま訳しては、日本人の耳に慣れず、混乱を生ずる。したがって、日本人の普通の名前に置き替えたのである。例えば、Roberts, Rhodes は甲州屋に、Lauren Y. Thomas は相模屋へと替えたのである。

2. 原書の商品名も、日本人に解りやすいように、外国の商品を日本語の商品名に置き替えたのである。例えば、Rio Coffee(リオのコーヒー)は上茶喜撰に、Best Black Tea(最高の紅茶)は、上茶玉露に替えているのである。

3. 商品(布)の長さについても、原書ではヤアルド(Yds.)を使っているが、翻訳では尺に置き替えている。

4. 原書にある「シングル・エンタリ」(single entry)は、略式に、「ダブル・エンタリ」(double entry)は本式と訳している。しかしこの訳は原書の意に叶うものではない。「シングル・エンタリ」は、一重に記すの意味であり、「ダブル・エンタリ」は二重に記すの意味である。しかし、この「一重に記す」及び「二重に記す」は、朝夕唱えるのに不便であることを恐れ、無理ながらも、略式と本式に訳したと福沢は解説している。

VI 『帳合之法』における単式簿記(略式または単記)と

複式簿記(本式または復記)

A 単式簿記

(イ)日記帳(Day Book)には、取引の借(Dr.)または貸(Cr.)のどちらかが記入されている。

(ロ)大帳(Ledger=元帳)には、豆屋、相模屋等の人名勘定のみが記入される。そして借(=借方)と貸(=貸方)の対照形式を持つ。ブライアント・

ストラットンの英文の場合は左右照であり、『帳合之法』による和文の場合は上下対照である。

(ハ) 惣勘定(=資産負債表)では、元手(Resources=資産)から拂口(Liabilities=負債)を差し引いた金(額)を現在の身代(Present Worth=資本金)として計上されている。第四式では、同人正味の利潤(Net Gain=純利益)が算出されている。

(ニ) 金銀出入帳(Cash Book)では、借(入)と貸(出)が上下対照形式でしめされている。

(ホ) 売帳, 手形帳, 手有帳は、借と貸の対照形式は採用されていない。

B 複式簿記

(イ) 日記帳には、単式簿記と同様に、取引の借または貸のどちらかが記入される。

(ロ) 清書帳(Journal=仕訳帳)は、取引を借と貸の上下対照の複式形式で作成されている。

(ハ) 大帳(Ledger=元帳)は、借と貸の上下対照形式が採用されている。大帳へは清書帳から取引が転記されている。大帳には人名勘定, 正金

(Cash) 勘定, 請取口手(Bills Receivable) 勘定, 品物(Merchandise) 勘定, 拂口手形(Bills Payable) 勘定, 雑費(Expense) 勘定, 損益(Loss and gain) 勘定, 平均(Balance) 勘定等が設けられている。

単式簿記

原著(Bryant Stratton)		帳合之法(福沢諭吉)	
第1部 単式簿記(single entry)		初編 略式(単記)	
第1セット	日記帳(Day Book) 元帳(Ledger)	第一式	日記帳 大帳
第2セット	日記帳 元帳 現金出納帳(Cash Books) 資産負債表(Statement)	第二式	日記帳 大帳 金銀出入帳 惣勘定
第3セット	日記帳 元帳 売上帳(Sales Book) 現金出納帳 手形帳(Bill Book) 資産負債表	第三式	日記帳 大帳 売帳 金銀出入帳 手形帳 惣勘定
第4セット	日記帳 売上帳 元帳 現金出納帳 曜日帳(Tine Book) 資産負債表	第四式	日記帳 売帳 大帳 金銀出入帳 手有帳 惣勘定

複式簿記

原著(Bryant Stratton)		帳合之法(福沢諭吉)	
第2部 複式簿記(double entry)		第二編 本式(複記)	
第1セット	日記帳 仕訳帳 元帳 合計試算表(Trial Balance-Face of Ledger) 残高試算表(Trial Balance-Differences) 資産負債表(Resources and Liabilities) 損益表(Gains and Losses)	第一式	日記帳 清書帳 大帳 平均之改一大帳の面を示す 平均之改一貸借の差を示す 元手と拂口 利益と損亡
第2セット	日記帳 仕訳帳 元帳 貸借対照表(Balance Sheet) 試算表(Trial Balance) 第2試算表(Second Trial Balance)	第二式	日記帳 清書帳 大帳 平均表 平均之改 第二平均之改
第3セット	仕訳日計表(Journal Day Book) 元帳 合計残高試算表(Trial Balance) 損益表(Losses and Gains) 資産負債表	省略 (不訳)	
第4セット	仕訳帳 現金帳 売上帳 元帳 合計残高試算表		

(ニ) 第一式の平均之改一大帳の面を示す(合計試算表)は、大帳(元帳)の合計金額が一表に示されている。同じく平均之改一貸借の差を示す(残高試算表)は、大帳の勘定の貸借差額の金額が一表にしめされている。第一式の元手と拂口(負債= Liabilities)を差し引いた金額 1570 を現在の身代(資本金=Present Worth)として計上している。利益と損亡では、利益(Gains)から損亡(損失=Losses)を差引いた金額 1570 を正味ノ利益(純利益=Net Gain)として計上している。

(ホ) 第二式のパッカルド氏所有ノ平均表(パッカルド氏の貸借対照表=S. S. Packard's Balance Sheet)は、貸借対照表というよりは、精算表に類する表である。この精算表は、平均の改(合計試算表= Trial Balance)、仕入残品(棚卸商品= Inventory)、名目一損亡(損失)と利益、元入(Stock)、事実一元手と拂口の五つの欄からなる。名目欄と元入欄の二つの欄で同種の純利益 533.05 が計上されている。

VII 『帳合之法』における「パチョーリ簿記論」の思想

世界で最初に出版された複式簿記に関する文献は、ルカ・パチョーリが執筆した『スムマ』すなわち『算術・幾何・比及び比例全書』(Summæ Arithmetica Geometria Proportioni et Proportion alita)である。この数学書は、1494年11月10日(または11月20日)にヴェネツィアで出版された。この『スムマ』は、308 フォーリオ、616 頁からなる大冊で、「パチョーリ簿記論」と呼ばれる部分は、第一部・第9編・論文第11の「計算及び記録に関する詳説」(particularis de computis et scripturis)というタイトルの197 フォーリオ裏頁(verso)から210 フォーリオ裏頁までの27頁である。

パチョーリは、論文の中で、複式簿記という言葉を使っていない。パチョーリは、自分の簿記論を「ヴェネツィア式簿記」とよんだ。この複式簿記という言葉が最初に採用したのは、ラグーサ出身のベネデット・コトルリである。コトルリは、1475年に作成された簿記論の写本の中で、複式簿記(dupple partite)という言葉が記述した。

「パチョーリ簿記論」は36章からなる。そこには、財産目録、日記帳、仕訳帳及び元帳等の三帳簿制、時価主義、年度決算、損益計算法、借方と貸方の意義、コンパニア(またはコンパニー=組合、会社)、ビランチオ、支店会計、銀行会計、人的勘定理論等が解説されている。さらに『スムマ』の中で「パチョーリ簿記論」以外の「商業論」(第1部第9編)の中ではコンパニア、交換、為替、利益、旅商等が詳述されている。

12-13世紀のイタリア商人による地中海商業は、コムメンダ及びソキエタス・マリスを中心とする遍歴商業は減少していった。そして定住商業(または定着商業)という新たな商業形式が出現した。現在、ヴェネツィアに残されているドナルド・ソランツォ、アンドレア・バルバリゴそしてジャコモ・バドエル等ヴェネツィア商人の会計帳簿も、定住商業を前提とした記録である。パチョーリの記述したコンパニーも、当座的または臨時的な冒険商売とは異なり、継続企業を前提とする定住商人による組合または会社組織である。

パチョーリの解説した三帳簿制は、パチョーリ以後出版された多くの簿記文献のなかで採用された。もちろん、福沢諭吉もこの三帳簿制を解説している。

従来、パチョーリは期間損益計算を知らないとする説が有力であった。

さらにパチョーリは、開始財産目録は詳述したが、決算財産目録には触れていないという説が強かった。しかし、パチョーリは、決算財産目録について記述していたのである。まさに、パチョーリは、期間損益計算を知っていたと推論することは可能である。またパチョーリは、決算に際しビランチオについて、かなり詳細に論述している。パチョーリは、ビランチオについて、資産、負債、資本、収益、費用、利益等の一覧表を思考していた。したがってこのビランチオは、残高試算表という見方が正当のようにおもわれる。

「パチョーリ簿記論」は、パチョーリ以前の多くの簿記実務組織を集合した理論と言える。そして「パチョーリ簿記論」を出発点として、世界各国で多くの簿記文献が出版されるのである。

ヤーコブ・ブルクハルト (Jacob Burckhardt) は、15 世紀末までの数学と自然科学におけるイタリアの卓越した三人の人物として、パオロ・トスカネッリそしてレオナルド・ダ・ヴィンチと並んでルカ・パチョーリの名前をあげている。

ハットフィールド (Hatfield) は、ルカ・パチョーリを近代会計学の父 (the father of modern accounting) と呼んでいる。さらに、「ある問題についてはじめて書いた著書がその後、その道の文献をかくも圧倒的に支配した事例はめったに見られないことである」とパチョーリの簿記書を絶賛しているのである。

この福沢の『帳合之法』も、イタリアのパチョーリ簿記論と同様に、日本における最初の複式簿記書として、その後の日本の簿記・会計史に極めて大きな影響を与えたのである。あたかもイタリアのルネッサンスの時代に、世界最初のルカ・パチョーリの簿記書が世に現れたのとほぼ同じ意義を明治初年の時代に示したものといっても過言ではないと考えられる。

『帳合之法』は、簿記論の解説書にすぎないが、その出版の意義はきわめて重要である。日本における最初の複式簿記文献であるのみならず、その後の日本簿記書に与えた影響は極めて大きい。わが国に実務的かつ近代的学問観を生成させ、資本主義的経済への方向を決定づけたものと言えよう。そして、この『帳合之法』の簿記論の中には、パチョーリ簿記論の技術も、多く取り入れられているのである。例えば、『帳合之法』で解説された日記帳、清書帳そして大帳の三帳簿制は、パチョーリが論述した日記帳、仕訳帳そして元帳の三帳簿制をそのまま引き継いだものである。またパチョーリが解説したビランチオ (残高試算表) は、帳合之法で平均之改

として解説されている。さらに、『帳合之法』で福沢が論述した勘定の学問、借と貸との事、仕訳の規則等は、パチョーリ簿記論の精神を受け継ぐものといえよう。

VIII あとがき

日本における近代会計学の出発点は、1873年(明治6年)に求めることができる。なぜならこの年に3冊の複式簿記に関する簿記書が日本で出版されたからである。第一は、福沢諭吉の『帳合之法』である。第二は、イギリス人アレキサンダー・アラン・シャンド(Alexander Allan Shand)の大蔵省・銀行事務講習所における講義要領を編集し、同年12月12日に刊行した『銀行簿記精法』である。この『銀行簿記精法』は、明治6年8月に営業を開始した株式会社第一国立銀行の業務に大きな役割を果たすこととなる。第三は加藤斌(なかば)訳の『商家必用』である。原書は、1872年にイギリス人のイングリシ(Inglis)が執筆した『単式及び複式による簿記』(Book Keeping by Single and Double)である。初編2冊(単認の部=単式簿記)は明治6年10月に、二編2冊(複式の部=複式簿記)と附録1冊は、明治10年4月に出版されている。

そして『帳合之法』は、アメリカ簿記書からの翻訳書である。ただし単なる翻訳書ではない。『帳合之法』の凡例の中で、福沢は独自の思想を論述したのである。それは、徳川時代の封建制度を批判し、西洋式近代文明の採用を提言した。すなわち、江戸時代に重要視された和漢書の暗誦を主とする学問を否定し、商業、工業、算学等を中心とする実学の重要性を解説した。そして実学の中心こそ『帳合之法』であり、その後の日本経済発展の礎となるものと主張したのである。福沢が同時期に著した『学問のすゝめ』を、学問に対する理論的解説書とすれば、『帳合之法』は、学問に対する実践上の解説書と言える。すなわち、2冊は学問に対する理論と実践という関連性から、同じ精神で結ばれていたのである。さらに『帳合之法』は、英語からの翻訳書とはいえ福沢の著書といっても差し支えないほど、独自の素晴らしい日本語による簿記書の解説書となっている。日本における最初の実践上の西欧文化の啓蒙書といえよう。

福沢は徳川時代の身分制度を否定し、自由平等な人間関係の形成を目指した。そして、『帳合之法』という日本最初の簿記書を公刊した。

イタリアルネサンス期に主張された人文主義は、中世の神一辺倒の思

想に対し、人間性の復活をめざすものであった。このルネサンス期の思想を持つルカ・パチョーリは世界最初の簿記書『スムマ』を出版した。そして我が国で出版された『帳合之法』こそ、パチョーリの『スムマ』と対比できる文献と言えよう。福沢の果たした業績は、カントのコペルニクスの転回に例えることができる。そして『帳合之法』こそ、本会計史上高く打ち建てられた金字塔と言えるのである。

(2016年4月2日第27回フォーラム 銀座交詢社中食堂にて)

◆ 本誌1ページの続き「久野秀男先生の思い出」

→ 内外の印刷文献を読み込み、株式会社の考課状を丁寧に照合して結論を得る地味な研究されておられました。ご自分は歴史家ではなくして、「史的アプローチ」によって物事の本質に近づく手段と口癖のように言われていたことが耳に残っています。

ご著書は『官庁簿記制度論』(1958年)にはじまり、『銀行簿記原理』(1968)、『無形資産会計計序説』(1969)、『現代資産会計論』(1970)、『財務諸表制度論』(1975)、並びに学習院大学出版の研究叢書『英米(加)古典簿記書の発展史的研究』(1979年/研究叢書5号)、『わが国財務諸表制度生成史の研究』(87/15号)、『会計制度史比較研究』(92/25号)などの大著があります。この最後の『会計制度史比較研究』には、「『会計』とはなんだったのか」の副タイトルのもと、先の Balance Sheet から決算公告までの『経済論集』に発表された論稿が掲載されています。

先生のご研究を称えてその都度研究叢書を用意された大学に敬意を表したく、またこの機会に先生の御労作を再読したいとも思います。なお、平成14年春に先生は勲三等瑞宝章を授与されました。ご冥福をお祈りいたします。

(文責:三代川正秀)

The  PACIOLI  SOCIETY  JAPAN

日本パチョーリ協会 〒171-0044 東京都豊島区千早3-4-2 三代川正秀
Tel. 03-3955-8783 [Email. mpacioli@aol.com](mailto:mpacioli@aol.com) <http://pacioli.world.coocan.jp/>